

巻頭言

日本学術会議では昨年秋に組織変更があった。深谷は、なぜか、20期会員になり、また（学術会議内にできた分野別委員会の一つである）数学委員会の委員長になったので、この場をお借りして、それらに関することを少し書くことにしたい。

変わったことの一つは、学術会議会員の選出方法である。

以前は、分野毎に定員があり（数学は2）関係する学会からでる選挙人（数学会からは2名出ていた）による選挙で選んでいた。日本数学会からでる選挙人がだれを推すかについては、日本数学会会員による選挙が行われていた。

新しい方式では、学術会議会員は現在の会員および連携会員による推薦をもとに、学術会議の中に作られる選考委員会が決める。分野別の定員はなく、会員になった後、自分の専門を申請する。

現在の数学を主たる専門とする会員は柏原正樹氏と深谷の2名であるが、この人数が今後どうなるかは定かではない。また、会員の矢川元基氏と武市正人氏に（他の分野別委員会と掛け持ちで）、数学委員会にも参加していただいている。

研連という制度も変更された。29期までであった数研連委員という制度はなくなった。それに一番近いのが、新たにできた学術会議連携会員である。連携会員についても、（研連委員とは異なり）分野別の定員はない。連携会員になった後、所属する分野別委員会を自分で選ぶ。連携会員の選出も、現在の会員および連携会員の推薦をもとに、選考委員会で決める。

連携会員は2000名中500名でいどが現在決まっており、数学委員会には、4月1日の時点で飯高茂氏、石井志保子氏、儀我美一氏、楠岡成雄氏、竹村彰通氏、藤井齊亮氏、宮岡礼子氏、北川源四郎氏の8人の連携会員が参加している。統計学委員会という分野別委員会がないせいもあり、統計学者の竹村・北川両氏にも加わっていただいている。

このように制度が変わり、結果的に数学会で今までやっていた選挙はできなくなってしまった。これは大変残念である。

このような変更がなされた理由として説明されたのは、学術会議を学会の圧力団体にはしないという、変更の方針によるとのことである。つまり、国の政策を所属する学会の利益になるように誘導する、ということ学術会議会員がすべきでないというのが理由だという。

今回の組織変更に対する私の意見は述べない事にしたい。

一方、学術会議会員は、数学者コミュニティーの意見をもとに、政策決定に関わる提言を行うのが、仕事の一つであるという点には変わりはない。たとえば、数学の研究の振興や、数学教育のあり方、数学の社会での使われ方、などについての数学者の意見を伝えるのが中心的な仕事であると理解している。

もちろん、数学者コミュニティーというのは、実体としては大変曖昧なものであり、例えば、数学研究に関わる政策に対する数学者コミュニティーの意見というのは、Well defined な概念であるとは思えない。すなわち、何らかの形で、誰

かが数学者コミュニティの意見はこうだろうというのを，その主観に基づいて判断せざるを得ない．制度変更の趣旨は，コミュニティの意見を会員・連携会員が個人の責任で集めろということであろう．もちろん，単に自分個人の意見だけをもとに，学術会議での意見形成に関わるべきであるとは思わない．何らかの形で，多くの数学者の意見を集めるべきであると思う．そのために，日本数学会が重要な場である事には変わらない．

現在学術会議で話し合われている種々の事柄を見ると，アカデミックな知見が政策決定に直接関わるような事柄が多い．数学の研究結果が，そのような意味で直接政策決定に関わる事は，まれであろうから，そのような事柄に数学者が多く関わるべきかどうか分からない．私は，そのような事柄に関しての個人（あるいは一国民）としての意見や考えを，数学者として選出されている学術会議の場に持ち出すことには，禁欲的であるべきであると考えている．

もちろん数学の研究結果が直接政策決定に関わる事がないとはいえない．また，現在学術会議で議論されていることの中でも，例えば，科学者の倫理に関わる宣言などは，数学者にも深く関わる事であろう．

一方で，数学などの基礎科学の振興に関することや，数学教育に関わることなどについては，数学者の意見を学術会議に伝えなければならないことが，多くあると思われる．学術会議は国の機関の一つ，つまり役所であり，そこから出される勧告や報告は，たとえば日本数学会などがだすものより，種々の場所で「公的」とみなされる可能性が高い．その意味で，学術会議から，数学者コミュニティの意見を正しく反映した，報告や勧告がなされることの意味は決して小さくないであろう．

20期の学術会議やその数学委員会は，連携会員の一部を選び，分科会（数学委員会，数理統計委員会，数学教育委員会）の設置を決めたところであり，具体的な活動は始まっていないので，ここに申し上げられることはあまり無い．儀我美一氏らの尽力で，シンポジウム「礎（いしずえ）の学問・数学 - 数学研究と諸科学・産業技術との連携 - 」を数学会と学術会議の共催で開催することになったのが，最初の具体的な活動であろうか．（とはいっても，私はそれには何も貢献していない．）

編集委員会からは，会員になった抱負を書いて欲しい，といわれたが，最初に書いた，なぜか，会員になったというのが，実感であり，したがって抱負はあまりない．

数学の研究が種々の理由で困難な状況を迎えていることは，間違いない事実であると認識しているが，学術会議という場でそれに関する活動が果たしてどのくらいできるか，最初からこのように言うのは大変申し訳ないが，あまり多くを期待できないのではないかと考えている．何か0でなく負でもない貢献ができれば良い．ぐらいが「抱負」であろうか．

深谷賢治 京都大学大学院理学研究科